

# 「メディアからみる格闘家のステレオタイプ」

学籍番号 70807368 総合政策学部 4 年 間嶋 正浩

## 【目次】

### 序論

- ・ 問題意識
- ・ 研究の意義
- ・ 仮説
- ・ 先行研究
- ・ 研究手法
- ・ 研究の限界

### 本論

- 0 章 序・格闘家のステレオタイプ
- 1 章 ストイックな格闘家
  - 1-1 武田幸三
  - 1-2 所英男
- 2 章 アウトサイダーな格闘家
  - 2-1 バダ・ハリ
  - 2-2 山本"KID"徳郁
- 3 章 ギャップ性のある格闘家
  - 3-1 長嶋"自演乙"雄一郎
  - 3-2 久保優太
- 4 章 力強い格闘家
  - 4-1 アリスター・オーフレイム
  - 4-2 魔裟斗

### 結論

## 【序論】

### 問題意識

本論文は、興業格闘技<sup>1</sup>に出場する格闘家がどのようにメディアに表象され消費されるのかを研究するものである。K-1 や PRIDE をはじめとする興業格闘技イベントは世界最大規模の格闘技イベントとして日本で誕生した。PRIDE は 1997 年に始まり、2007 年にアメリカ格闘技団体 UFC に買収されるまで、世界最大の格闘技イベントとして流行し、総合格闘技の発展に貢献した。また、K-1 は、1993 年に日本で生まれた格闘技イベントであり、現在まで続く世界で最もメジャーな格闘技団体の一つである。空手道場である正道会館の石井和義がプロデュースし、従来のキックボクシングとは異なる、大衆向けのイベントとしての格闘技興業を作った。1993 年以来、ヘヴィー級を軸として大会を開催し、大会を重ねるごとにミドル級、ライト級へと徐々に展開し、1996 年には、フジテレビにてゴールデンタイム放送が開始され、2003 年大晦日では、瞬間最高視聴率 43% を記録した。2000 年以降、世界各地で地区予選大会が開かれるなど、その人気や知名度は世界的なものになった。

このような格闘技興業はメディアによって伝達され、テレビやインターネットをはじめとする情報技術によって大量消費が可能になる。その意味で、従来の柔道や空手などの格闘技とは異なったメディア・スポーツ・スペクテイター・スポーツとしての格闘技であると言える。本論文では、現代、特にここ 20 年に発生した K-1, PRIDE などの興業格闘技に焦点を当て、そこで生まれた格闘家<sup>2</sup>がどのようにメディアに取り上げられ、伝達され、消費されるのかについて研究したい。

現代において、スポーツ文化はメディアによって秩序づけられていると言っても過言ではない。メディア・スポーツ<sup>3</sup>は、多数の「テキスト」（まとまりのある文化的社会的言説）から成り立っていて、その多くは標準化され、反復的なものである。また、ある種の慣例やコードに基づいて組み立てられており、テキストの送り手や受けての文化に存在するよく知られた、あるいは隠れたイデオロギー・神話イメージに依拠しているのである。つまり、スポーツジャーナリズムの伝えるメディア・スポーツは文化的・社会的意味の解明に役立つテキストとしてとらえられる。<sup>4</sup>

宮崎幹朗によれば、実際にテレビのスポーツ中継はゲームそのものによって成り立つのではなく、テレビカメラの切り取ったゲームとしての「映像」と、アナウンサーの実況や解説者の語る「言葉」によって成り立っているという。<sup>5</sup>映像と礼儀的な言説を駆使して、体面を維持する「物語」が作られているのである。ニュースやコマーシャルにみられるように、メディアによって作り出されるスポーツ情報はいたるところに侵入し、氾濫していると言ってもよい。その情報の量的な増大もさることながら、質的な変化も見逃せない。情報化社会とは、情報に価値がおかれる社会であるから、スポーツ情報においても商品化されるのも当然の帰結である。いかにスポーツの情報が商品として売れるかということで、業界はしのぎを削っている。したがって、もはやスポーツ情報はこれまでのような、単に事実をどれだけ正確に伝えるかという段階を超えて、いかにそのリアリティを際立たせるか、さらに言えば、いかに人々を感動させるドラマに仕立て上げるかにかかわっていると言える。<sup>6</sup>われわれが感動するのは、単なるスポーツという現実ではなく、テレビというメディアによって作り出された「見せかけ」文化としてのスポーツに他ならない。<sup>7</sup> また、観客が何を期待するかという点でそれぞれ文化的な違いがある。日本の野球においては、四番打者であっても、チームの勝利にとって必要であれば、スクイズをする。観客は、自分の能力を犠牲にしても、チームの勝利のために尽くす姿を期待しているのであり、その期待に沿った

<sup>1</sup> スペクテイタースポーツ（興業スポーツ）としての格闘技。

<sup>2</sup> 以降、本論文では興業格闘技団体に出場する選手を「格闘家」と定義する。

<sup>3</sup> マスメディアによって搬送されるスポーツの国際的呼称

<sup>4</sup> 「スポーツ・ジャーナリズム」橋本純一

<sup>5</sup> 「テレビの中のスポーツ」宮崎幹朗

<sup>6</sup> 『スポーツ文化の変容』杉本厚夫

<sup>7</sup> 「現代文化のとらえ方」井上俊

プレイなのである。その意味で、スポーツという舞台には、その社会・民族の文化が投影されると言える。

本研究では、いくつかのメディア、すなわちベースボールマガジン社『格闘技通信』や文藝春秋社『Number』などの格闘技に関連する雑誌や、試合前に選手紹介として流される「煽りVTR」などを使って、格闘家がどのように表象されているのか考察することによって興業格闘技の文化を明らかにしていきたい。

## 研究の意義

スポーツは、社会の特定の人々によって特別な意味を預けられている。様々な文化の中で意味のある思想や信念と結び付けられ、家族、宗教、教育、経済、政治さらにメディアなどの社会生活の諸側面と連結される。スポーツ文化は、その国の政治的経済的その他の多くの社会的要因によって大きく影響されてできるものである。

本研究では、格闘技文化的背景を明らかにする。そして、日本のスポーツ文化を興業格闘技という特定のスポーツに焦点を当て明らかにしていくことで、日本文化を理解する一助になりうると考える。したがって、本研究の意義は、格闘技のメディア研究を通じて格闘技文化を明らかにすること、イベントスポーツという側面から日本文化を理解することにある。

## 仮説

本論文の仮説は、格闘技文化の背景が労働者階級にあるということである。格闘技のステレオタイプはどのようなものがあり、どのようにメディアに取り上げられ表象されているのかを、代表的な格闘家を個別に注目していくことで明らかにする。格闘技格闘家のステレオタイプとして「スティックな格闘家」「アウトサイダーな格闘家」「ギャップ性のある格闘家」「力強い格闘家」が挙げられる。このような格闘家像は、メディアによって創られ伝えられ、反復されるが、極めて労働者階級文化とちかいものである。男性性の強調などのジェンダー・イデオロギーを初めとするさまざまな文化的イメージやメッセージが格闘技文化に存在しメディアによって搬送されている。これらがどのように労働者階級文化と関連しているのかを本論でみていく。

## 先行研究

『力道山をめぐる体験』（小林正幸）は、プロレスがメディアを通じてどのように伝達されたかについて述べられているが、格闘技文化全般を扱うものではない。『現代スポーツの社会学』（J コークリー）では、スポーツがイデオロギーの強化や再生産につながる過程や、メディアが与える影響などについて述べている。また、『スポーツ文化の変容』（杉本厚夫）は、スポーツ全般の文化の変容についてとりあげ、マンガのコマ崩しに見られる文化の転形を論じている部分などは、大変参考になる。しかしながら、格闘技や武道に絞ったものはなく、またメディアによって分析されたものも少ない。

## 研究手法

本研究の研究手法は、「批判理論」を用いる。批判理論は、スポーツ社会学において代表的な理論であり、スポーツは文化や社会関係が生み出され変化する場である、とするものである。批判理論は、人々が文化的イデオロギー<sup>8</sup>を獲得し維持するプロセスに、スポーツがどのような影響を与えるかをみる。

批判理論の前提は以下の3つである。①手段や社会は、共有された価値と利害の対立によって特徴づけられる。②価値や社会組織についての合意は、決して固定的ではないので、社会生活は交渉、妥協、矯正のプロセスの連続である。③集団間の力関係が変わるので、価値や社会組織は、時とともに異なる状況へと変化する。

また、批判理論は①文化が生産され、再生産され、変化するプロセス、②文化の生産、再生産、変化のプロセ

<sup>8</sup> 自分たちの社会的世界やその中での経験を説明し、それに意味を与えるために使う考え方や信念が編みこまれたもの。

スへの権力の集中や社会的不平等の関わり方、③世界を理解し、アイデンティティを形成し、他者と相互作用し、生活の条件を変えるときに人々が使うイデオロギー、の3つについて焦点化する。本論文では、メディアにおける格闘家の表象のされ方をみることによって、格闘技文化の生産について明らかにする。また、その際、どのような背景、側面があるのか、スポーツあるいはスポーツ経験に意味を与えるために、人々はどのような物語やイメージを使うのかについてみていく。

## 研究の限界

本研究では、上記のような研究手法において、過去の雑誌や VTR などのメディア情報を基に格闘技文化について明らかにしていくが、格闘技イベントという特定の分野に限った文献は無い。個別的な状況を取り上げていくため、これらが格闘技文化の代表性を担保しうるかなど、正確に反映されないかもしれないという点で、必ずしも実証的な調査が可能とは言い切れないといえる。

## 【本論】

### 0章 序・格闘家のステレオタイプ

格闘家のステレオタイプには、次のようなものがある。すなわち、「ストイックな格闘家」「アウトサイダーな格闘家」「ギャップ性のある格闘家」「力強い格闘家」の4つである。

「ストイックな格闘家」とは、不遇な環境や恵まれない状況の中で厳しいトレーニングに取り組む姿が強調される格闘家である。格闘家がストイックに取り組む対象は、練習そのものや病気、貧困、減量など特定ものに絞られる。ここでは、厳しい環境を乗り越え、成功を手にするというサクセスストーリーとして描かれることが多い。「アウトサイダーな格闘家」は、規範からはずれたアウトサイダーのよりどころとして格闘技が存在する。アウトサイダーな格闘家は試合以外での私生活での粗暴など、とくに感情の爆発や暴力事件などの逸脱行為が描かれる。このような格闘家は、アウトサイダーとして描かれつつも、試合経験を積むなかで更生していく成長過程が強調されやすい。「ギャップ性のある格闘家」は近年に多い傾向のある格闘家である。すなわち、ストイックやアウトサイダーなどの従来の「格闘家イメージ」とはかけ離れたキャラクターでありながら、試合場では従来通りのキャラクターとして、そのギャップ性に重心がおかれる格闘家である。このような格闘家が闘う場合、「オタク vs 不良」、「エリート vs 非エリート」などの対立構図が描かれやすい。最後に「力強い格闘家」とは、もっともスターとして描かれやすい格闘家像である。肉体的な強さもしくは強靱な精神性によって「男らしさ」を訴えることで典型的な格闘家像を作り出していると言える。リスクをもちとわかない攻撃的なファイトスタイルや圧倒的なパワーをもっているものとして描かれる。

このステレオタイプは各々に独立して存在するのではなく、相互に組み合されながら表象されることが多い。これらの格闘家のステレオタイプはメディアを通じて生産され、大衆に伝えられる。その意味で、これらの要素を持つことが格闘家として人気選手となる不可欠な要素であるともいえる。メディアがどのように格闘家を表現し、ファンに伝えられるのかを、以下具体的にみていく。

## 1章 ストイックな格闘家

### 1-1 武田幸三

武田幸三は、1972年12月27日生まれのキックボクサーである。身長173cm、体重70kgでK-1にも出場経験を持つ。国際総合武道教育連盟顧問であり、空手5段の武道有段者でもある。ニックネームは「超合筋」「ラストサムライ」などであり、トレーニングによって鍛え抜かれた体から「超合筋」、基本に忠実な愚直な闘い方、決して折れない心を持つといわれるところから、そしてその風貌から「ラストサムライ」と呼ばれる。2日に2回点滴を打つほど練習を繰り返したり、皮が破れ、スネの骨が見えるまでキックの練習をやめないなど、「根性」や「男気」などをキーワードで紹介される逸話も多い。得意技は鍛えたスネによる右ローキックであり、パンチよりも一撃必倒性はないものの、ダメージが蓄積し徐々に削っていく攻撃スタイルが愚直なキャラクターと相まって、人気を博した。また、過酷な減量や、毎日煮込んだ鶏のささみを食べるなど、食生活での厳格さ、まじめさも紹介される。

2008年12月31日、「Dynamite!!~勇気のチカラ2008~」で行われた川尻達也との試合前VTRでは、「男気ダービー」と当該試合が評された。このVTRでは「キックのサムライ、大晦日の討ち入り」と武田は紹介され、「超合筋パンチと鋼鉄のローキック」と得意技が紹介されたのち、武田は「僕はいつも折るつもりで蹴ってるんで」「肉を切らせて骨を断つスタイル」「僕の場合は大体勝っても負けてもどっちか倒れているんで。やっぱこの道で生きていきたいですね。この道で家族食わしてますから。だから試合の度に色々、整理してリングに上がりますけどね」と発言し、試合前には「遺書」を書くで紹介された。「遺書」という言葉が何度も画面の真ん中にテロップ表示され、試合前に「遺書」を毎回書くほど試合に対して、覚悟を決め、武士のような心持ちで試合に

臨むかのように表現されている。また、公開練習では蹴りこんだ足から血が流れ、上から薬を塗るというシーンも強調された。紹介の最後には「来世もたぶん格闘技をやります」という発言があり、厳しい練習に耐えながらも、自ら進んで厳しい道を選んでいると思わせる発言によって、武田の自分へのストイックさがより鮮明に浮かび上がらせるよう編集されている。

さらに、2009年10月26日に行ったK-1での引退試合の後の日刊サイゾーのインタビューでは、引退したのにも関わらず「前回の試合が終わってから一週間後には練習を再開していました。現役中は、例えば腹筋ひとつやるにしても、きつくなってからどこまでできるかがその日の練習なんですね。きつくなるまでは準備運動みたいなもので」「軽い練習をしてもおもしろくなくて、結局いまは現役中とほとんど変わらない練習をしていますよ」と発言し、今なお厳しい環境で練習に取り組んでいることを明らかにした。また、歴戦のダメージが深く、試合で痛めた目が「日常生活にはギリギリ支障はない」としながら「なかなか完治しない」として、大きな代償を支払いながらも闘い続けた格闘家像として描かれた。武田は、このようなストイックな格闘家像の代表として挙げられことが多い。

## 1-2 所英男

所英男は、1977年8月22日生まれの総合格闘家である。身長170cm 体重63kgと小柄ながらも、グラウンドを中心とした動きの多い試合展開をみせ、人気を博した。戦績自体は27勝21敗と勝ったり負けたりが続いているものの、負けん気の強さや豊富なスタミナからくるアグレッシブな試合展開と極めの強さから、未だ大舞台上で活躍する選手である。ニックネームは「逆境ファイター」「闘うフリーター」「シンデレラボーイ」である。これは、所が格闘家としての成功を機に、貧乏生活から一躍人気スターとなり、裕福な生活へと脱却できたことから「シンデレラボーイ」、HERO'S<sup>9</sup>参戦当初はアルバイトをしながら生計を立てていたことから「闘うフリーター」などと呼ばれるようになった。

2005年7月6日、HERO'S初参戦時に、ミドル級世界最強王者決定戦トーナメント開幕戦において、修斗世界ライト級王座を6年間にわたり防衛をしているフリムカ・ノゲイラにTKO勝利する大金星を挙げ、一躍シンデレラボーイとして脚光を浴びるようになった。選手紹介VTRでは、狭い部屋で「魔裟斗さんはこんな食えないですよ？」と言いながらコンビニ弁当を頬張る姿や、クリーニングのアルバイトに精を出す姿が映し出され、苦勞しつつも格闘技での成功を諦めない所のまじめさが強調されている。また、2006年5月3日のHERO'S2006年ミドル級世界最強王者決定トーナメント開幕戦における、ブラック・マンバ戦での入場シーンでは、アナウンサーは次のように所を紹介する。「敗戦の悔しさを胸に、所は体を鍛え抜いてきた。そして心を鍛え抜いてきた。頂点を目指す逆境ファイター所英男、闘うフリーター所英男。逆境ファイター、闘うフリーター、今も所は、六畳一間、43000円のアパートに暮らしている！まだ所のクラス部屋には風呂はない。流しで頭を洗っている。所英男はこの逆境に勝って、そして、世界一という座を自らつかんで、所英男というファイターを、さらに大きく大きく高いところにもっていくんだ！」さらに、2008年12月31日Dynamite!!~勇気のチカラ2008~の中村大介戦での紹介VTRでは、「フリーターが手に入れたもの、それは、地位、名誉、そして車を一括払いで購入し、風呂つきの部屋に引っ越した。さらにあこがれのワカパイ<sup>10</sup>をお部屋に招待し、コンビニ弁当を手に取り過去の自分を笑えるまでになった」と高層マンションのベランダから眺めるシーンと共に紹介され、逆境を乗り越え厳しい練習の結果、フリーターの苦しい生活から脱出した成功者として描かれている。その後も、所は格闘家の成功物語の典型例として取り上げられることが多い。入場曲はデビュー以来一貫して、所ジョージ作詞・作曲の「逆境ファイター」である。

<sup>9</sup> HERO'Sは2005年から2007年にかけて開催されたTBS主催の格闘技興業。地上波で放送されメジャーイベントとなった。

<sup>10</sup> 井上和香。日本のアイドル、女優。元グラビアアイドル。

## 2章 アウトサイダーな格闘家

### 2-1 バダ・ハリ

バダ・ハリは1984年12月8日生まれのアムステルダム出身のキックボクサーである。身長197cm、体重110kgで、初代K-1ヘビー級王者、SHOWTIME世界ヘビー級王者である。試合前のビックマウスや乱闘事件や反則行為など、歯に衣着せぬ発言や自由奔放な行動をし、悪童、アウトローといった印象が強い。ニックネームは「THE GORLDEN BOY」であり、これはバダが「俺が触ったものはすべて金になる。俺がリングを触ればリングが金色に、俺が女の子を触ったら女の子が金色になる。だから、俺はGORLDEN BOYだ」と言ったことに由来する。

2006年3月5日のK-1 WORLD GP 2006 IN AUCKLANDに出場の際に出席した試合前日記者会見では、対戦相手のピーター・グラハムに因縁をつけ、素手で殴りかかるという喧嘩騒動を起こした。(この喧嘩騒動は以降、試合前VTRにてバダを紹介される際に毎回のように使用され、悪童としてのキャラクターが強調される。)また、同年9月30日K-1 WORLD GP 2006開幕戦でルスラン・カラエフと対戦した際には、KO負けという結果に納得のいかなかったバダは、控室までの帰り道にスピーカーや案内標識を叩き壊すなどの行為をした。さらに2008年12月6日K-1 WORLD GP 2008 FINALの決勝戦では、1Rで相手のレミー・ボンヤスキーにダウンを奪われ劣勢になると、2Rにはレミー・ボンヤスキーの足をすくい倒し、審判が制止しているにもかかわらず倒れているレミーに対し殴る、踏みつけるなどの悪質な反則を犯し、失格となった。なお、この行為によって、ファイトマネーの全額没収、準優勝の資格および賞金の取り消し、K-1ヘビー級王座はく奪という処分が行われた。このように、リング内外を問わず、アウトサイダーな格闘家として、バダは捉えられる。

2007年12月8日K-1 WORLD GP 2007 FINALでのレミーとの試合前VTRでは、導入部に「THE GORLDEN BOY」の文字が繰り返し写しだされ、「オレがレミーを傷つける。辛い目にあわせる。地獄に落とす。痛みを教える」と発言し、「K-1 きっとの問題児」として紹介される。さらにナレーターは「ストリート育ちの彼にとって、リングもその延長線上にすぎない」として「やるか、やられるか、制御不能のド突き合い精神」としてバダの闘いを紹介しつつ、バダの「アイツが大嫌いだ。レミーがガタガタ言うならリングの外でもやってやる。レミーとミルコ(レミーの練習パートナー)がラウンドごとに交代してもかまわない。ミルコもまとめてKOしてやる」という発言を紹介しており、悪童ぶりが強調されていると言える。

しかしながら、2009年12月5日のK-1 WORLD GP 2009 FINALで行われたルスラン・カラエフとの3度目の対戦前のVTRでは、バダの気持ちの変化を描写し、「今までとは違うんだ。俺にとっての戦いはジムから始まっている。自分とトレーナーの一番ハードな戦いさ。だからリングの中もイージーに感じられるよ。この練習なら毎日やっても平気さ」と発言し、勤勉に練習に取り組む様子が描かれている。また、以前の暴行事件や反則事件に関して、「あの頃は子どもだったな。誰だこのおかま野郎は?って思うよ」と発言し、以前のような感情に任せた行動はしないと、精神的に成長した姿を見せた。さらに、2010年4月3日に行われたK-1 WORLD GP 2010 IN YOKOHAMAのアレクセイ・イグナシヨフ戦での試合前VTRでは「ファンを楽しませることが一番重要なんだ。グランプリにそれほど重きを置いていない。」「試合を見に来てくれるのもうれしい。私もこのままだよ、それが一番の目標だ」と発言しているところが取り上げられ、以前とは違った試合に対するモチベーションを表明し、改めて真摯な態度を見せた。このようにデビュー当初からアウトサイダーとして問題を起こすトラブルメーカーであるものの、試合を通じて少しずつ成長し、ファンのために闘うようになっていく姿が、より人気に拍車をかける一因となったと考えられる。

### 2-2 山本"KID"徳郁

山本"KID"徳郁は1977年3月15日生まれのアムステルダム出身の総合格闘家、K-1ファイターである。父である山本郁榮は日本の

元レスリング選手、現在日本体育大学スポーツトレーナー、姉の山本美優と妹の山本聖子ともにレスリング世界選手権を連覇するなど、レスリングエリート一家に生まれた。フェザー級の体重 63kg であり、身長は 163cm と小柄であったが、レスリングで鍛えた圧倒的なフィジカルと体のバネ、脅威的な身体能力で高い KO 率を誇った。ニックネームは「神の子」もしくは「KID」である。これは、自らを「格闘技の神様の子」と発言したことから由来する。また、試合中に相手を挑発した態度をとったり、相手を KO しレフェリーが止めに入っているにも関わらず攻撃を止めず殴り続けたり、同チーム選手のセコンドに就いた際にはレフェリー、相手チームに暴言を吐くなど、素行が悪いことで知られている。山本と同チーム選手菊池昭の試合後には、ドクターに暴言を吐いた上に暴行し、チーム所属選手全員に修斗大会への公式戦出場停止処分、無期限ライセンス不許可処分が言い渡されるなど、枚挙に暇がないほどである。さらに過激な試合前のマイクパフォーマンスに、前述の凶暴な性格、多くのタトゥーに怖い風貌、圧倒的な勝率・KO 率から他の格闘家に比べて多大な人気を得、スターとして扱われようになった。

K-1 初参戦になった「K-1 WORLD MAX 2004 ～日本代表決定トーナメント～」1 回戦では、自らを「格闘技の神の子」「試合になったら思う存分楽しむ」などとインタビューで答え、煽り VTR で山本の未知な強さ、怖さが強調され、対戦相手である村浜武洋を挑発した。試合では優勝候補と目された村浜を初参戦ながら 2RKO 勝ちを収め、試合中にはノーガードで挑発したり、笑顔を見せるなど不気味さを印象付けた。地上波放送された同試合で、解説を務めていた谷川貞治 K-1 イベントプロデューサーは「すごい闘争心ですね」などと述べており、ニコニコ動画コメント欄では「野性味ハンパない」や「怖い」「野生児」「目がやばい」などの印象が書き込まれている。この試合がきっかけに、山本は知名度を持つようになり、その後も、UFC126 大会直前インタビューで「間違いなく余裕で勝てる」と述べていることからわかるとおり、ビックマウスで、相手を挑発する態度が続いた。これらに加え、日常生活での喧嘩騒ぎなど、スポーツエリート家庭出身でありながら不良・アウトサイダーとしてのイメージが強くそれゆえに人気を得たともいえる。

### 3 章 ギャップ性のある格闘家

#### 3-1 長嶋”自演乙”雄一郎

長嶋”自演乙”雄一郎はオタクを自称する K-1 ファイターである。1984 年 7 月 2 日生まれ、身長 170cm、体重 70kg のミドル級選手である。通称は「コスプレファイター」または「侵略のアニオタ野郎」である。オタクを標榜する一方で、試合では積極的に攻撃を仕掛け、高い KO 勝利率を誇る。また、日本拳法という武道をバックボーンにしており、K-1 の基礎となったキックボクシングとか異なる独特のリズムで攻撃し、デビュー以来 12 連勝を記録するなど、そのオタクキャラクターと勝負強さのギャップに注目を集め、人気を得た。リングネームである「自演乙」は、ネット用語で、「自作自演お疲れ様」という意味のものからとったものである。記者会見は常にアニメのコスプレで登場し、対戦相手を挑発する。ファンにとって長嶋の入場は、試合以上に重要であると考えられる。長嶋の入場は必ず、アニメのテーマソングを流し、それにちなんだコスプレでダンスを披露する。女子高校生役ダンサーを数十人雇い、入場ステージで踊ることもしばしばである。コアなファンは、長嶋と同様のコスプレで大会会場に出向き、同様に踊るなどして応援する。地上波放送では、他の選手では入場シーンが省略され試合のみが放送されることが多い一方で、長嶋は常に入場シーンが放送される。

入場コスプレには、『涼宮ハルヒの憂鬱』や『ハレ晴レユカイ』などがあげられる。『格闘技通信 No.455』(2009) のインタビューでは、「まだまだ僕なんて、ヌルオタです」と語る。「逆にハルヒ好きっていうと、にわかファンと間違えられるリスクすらありますから。」「僕なんてまだまだ、ヌルヌルですよ(笑)。ヌルオタってというのは、まだまだ甘い。ガガチオタってというのは、ほんまにそれしかない超コアファンですね。」「やっぱり今期の作品をほとんど見てて、ほとんどのキャラクターを暗記してて、口癖、フォームなりをマスターしている人はガチオタ

です。僕はやっぱり練習とかあって、ちょっと見逃したりしちゃうんで、ガチオタを語る資格はないです。」

また、一方で学生時代イジメにあい、登校拒否であった過去もある。「中学、高校のときはちょっと暗かったですね。というか、引きこもりでした。」「ドアを開けたら急に靴を投げられたりとか。」「理由はわからないですけど、学校に行きたくなくなったきっかけがあって、長期で休んでしまっただけ。」このような背景もあり、従来の格闘技ファン以外に、オタクや引きこもりの人のファンを新たに開拓したと言われている。「アニメはかわいいキャラって決まってるんですけどね。でも、選手だと屈強なファイターが好き！！」「アニメは萌えキャラがいい(笑)。」しかしながら、「リングにあがったら倒れて帰るなんて考えてませんから。頭の中にはシウバ(Prideミドル級元王者。アグレッシブなファイトで初参戦から5年間無敗、絶対王者と呼ばれた)のイメージしかありませんから」と語るように、リングの中では、オタクの雰囲気は一切ない。このようなギャップが一部のファン層を開拓し、人気が出たのだと考えられる。

### 3-2 久保優太

久保優太は1987年10月19日生まれのキックボクサー、K-1ファイターである。体重63kgのライト級でありながら身長は175cmと高い上背とリーチがある。テコンドーをバックボーンとした多彩な蹴り、長いリーチを生かしたステップワークを駆使し、デビュー以来16連勝し、日本を代表するファイターとなった。ニックネームは「微笑みスナイパー」、最近では「久保きゅん」である。これは、久保が普段から謙虚な態度に爽やかな笑顔、甘いマスクなど一見格闘家らしからぬ風貌をしており、好青年といった印象をもたせる一方で、試合になると本能むき出しのスタイル、圧倒的な強さと非情な老獪さも併せ持っていることから、「微笑みスナイパー」と呼ばれた。好青年に日本代表クラスの実績から女性ファンが多い。普段はニコニコと笑窪のある笑顔を見せることと、試合中の強さ、そして試合後の相手への謙虚さなどのギャップがメディアでしばしば取り上げられる。

FIGHT FOR JAPAN『K-1 WORLD MAX 2011 ~-70kg Japan Tournament FINAL~』の9月22日の試合前インタビューでは、極めて謙虚、優等生らしい受け答えがうかがえる。「次は世界を目指すという気持ちでトレーニングしてきました。前回のトーナメントでは相手をKOすることができなかつたりとか、たくさんの課題が見つかったのでそういったところを改善するように意識してやってきました。」「やはりお客さんがあってのプロスポーツですし、お金を出して頂くからには、ファンの方々のそういった声(不満の声)は大事だと思っています。チャンピオンにならせて頂いたことで、そういった部分での意識が変わってきたと感じています。特に今は格闘技にあまり元気がない時代ですので、その分も僕が頑張っって、盛り上げていきたいと思っています。」

このようにインタビューでは、インタビュアーの質問に対して「はい、はい」と相槌をうち、応答内容は観客までを意識したパフォーマンスや業界全体の景気にまで言及し、格闘技に対する誠実さが伺える。しかしながら、DJ.taiki vs 久保優太煽りVTR(2010)では、「ベビーフェイスな悪魔」と紹介されており、「試合は本当に楽しいと言うか、自己表現できる場所」と言いつつ、「試合では、こう、熱くなって、野性的な本能というか、やっぱ相手のこうKOできるパンチをかわすとか、自分のパンチを当てて相手が倒れるとかそういうスリリングな、なんて言ったらいいんですかね、言葉では上手く言い表わせないけど、自分の中の、悪魔な自分が出ている気がします」と紹介されている。ここでは、「悪魔な」というワードが赤く太字でテロップによって強調されており、好青年の中に悪魔的な本能が宿っており、試合を通じて悪魔的な部分が解放される、といったような解釈を促すことで、ある種の不気味さを普段の好青年という印象とのギャップによって表現していると言える。このようなキャラクターがメディアを通して人気を博し、若い女性を中心に幅広く人気があり、次世代のスター候補として期待されている。

## 4章 力強い格闘家

### 4-1 アリスター・オーフレイム

アリスター・オーフレイムは1980年5月17日生まれのオランダの総合格闘家、キックボクサーである。身長192cm、体重121kgである。以前は減量をして93kg級として活躍していたものの、現在では大幅増量し、好成績な結果をおさめている。巨大な筋肉にも関わらず体脂肪率は8%を保っており、その体から繰り出される攻撃は破壊力があり、壮絶なKO勝利を生むことが多い。大きな体とKOを生み出す強力なパンチと得意の膝蹴りは、見る者に圧倒的な力強さを印象づける。ニックネームは「デモリションマン」で、これはKOを生み出す力強い戦いから「破壊者」の意味としてつけられた。

K-1参戦当初は総合格闘家であるという理由から外敵として扱われたが、2010年では、優勝候補筆頭として主役として位置づけを変えた。また、よしもとクリエイティブ・エージェンシーに所属するなど、見た目の分り易さから、日本での芸能活動も行っており、過去には「笑っていいとも」や「ガチ相撲」などエンターテインメント番組にも出演している。

2009年12月5日の、K-1 WORLD GP 2009 FINALでのエヴェルトン・ティシェイラ戦での試合前VTRでは、ハンマーで自転車を叩き壊すシーンや、重い重量を挙上しながらトレーニングするシーンが強調された。また、2010年12月11日のK-1 WORLD GP 2010 FINALでのタイロン・スポン戦での試合前VTRにおいても、激しくミットを打ち込む姿や、イベントで女性を5人同時に持ち上げているシーンなど、大きな力を持っていることが強調された。さらに「史上最強のマッスルモンスター」「途切れることのない闘争心と世界最強への夢もある」と紹介されつつ、アリスターは「俺は、どのK-1ファイターよりも速くてパワフルだ。おれは戦略的だし常にノックアウトを狙いにいってる。最強になりたい。K-1のチャンピオンになりたいんだ」と発言し、数々のKOシーンと共に紹介された。このようにアリスターの紹介VTRは、ほとんど彼の私生活での特徴やキャラクター性について言及されず、大部分がこれまでの試合映像、とりわけ壮絶なKO勝利シーンや、力強くパンチを放っている練習シーンになっている。アリスターに関するサブストーリーを作ることよりも、試合内容そのものにフォーカスを置いた編集になっており、その期待通りの試合をしていくことで、人気を博したと言える。

### 4-2 魔裟斗

魔裟斗は、1979年3月10日生まれのキックボクサーである。2009年に引退して以来、タレント、スポーツ解説者として活躍している。妻は、女優・タレントの矢沢心である。身長174cm、体重70kgで、日本初のK-1 WORLD MAX世界王者である。K-1の中量級を創世記から支え、好戦的なファイトスタイルに強いフィジカル、バランスのとれた技術に豊富なスタミナとあらゆる要素において高い水準を保つことで高い勝率を誇り、引退まで圧倒的な人気を誇った。甘いマスクも相まって、「さんまのまんま」や「ジャンクスポーツ」など数多くのテレビにも出演し、俳優活動も行った。ニックネームは当初は「反逆のカリスマ」だが、K-1 WORLD MAX世界王者になった後は、「魔裟斗」という名まえそのものがK-1中量級の代名詞として扱われるほどであったため、このニックネームが用いられることは少なくなった。

魔裟斗においても、アリスターと同様にサブストーリーが付け加えられることは少ない。試合前VTRでは激しくミットを蹴りこむ姿や、ダッシュによって追い込むシーン、またはそれまでの試合での名勝負が引用されることが多い。圧倒的な強さによって勝利の山を築く大スターとして描かれる。

また、魔裟斗に関して最も言及されることの一つに、精神的な強さがある。誰よりも厳しい練習を耐え抜き、スターとしての重圧のなか、リスクをいとわず積極的な挑戦者である姿が強調される。『ゴング格闘技』No.198で書かれた、世界王者に返り咲いた後のインタビューである「死闘の果てに」では、魔裟斗の心の強さが描かれている。魔裟斗自身、「根性あるでしょ?」「どんなテクニシャンだろうと、最後は体力と気力をどこまで振り絞るかだからね。」「絶対に勝負を捨てないと思っていたし、途中で心が折れなかった」と発言し、専属トレーナー

であるヌアトラニートレーナーは、魔裳斗が優勝した理由について、「なによりチャイ・スー（タイ語で「強い心」）があったから。試合前も優勝する、優勝すると何度も何度も言っていたんだ。並々ならぬ気迫を感じていたよ」と語り、天性の心の強さがあると説明した。このように決して不利な状況に立ってもあきらめず、戦う姿は多くのファンの心を打ったのだと考えられる。

## 【結論】

本章では、結論として、格闘技の文化的背景が「労働者階級文化」にあるということを述べたい。

以上みてきたように、「ストイックな格闘家」「アウトサイダーな格闘家」「ギャップ性のある格闘家」「力強い格闘家」はそれぞれ、格闘家のステレオタイプであると言える。このような格闘家像は、メディアによって創られ伝えられ、反復される。メディアによって搬送されるメディア・スポーツは、聴衆のアイデンティティの源泉になりうる。<sup>11</sup>メディア報道におけるイメージと語りは、支配的なイデオロギーや考え方を強調するからである。したがって、メディア・スポーツはある特定の文化的背景を前提とした編集である。その意味で、格闘技においても特定の文化を下敷きにしたメディア編成がなされるのは、当然であるといえる。

格闘技は典型的な「パワースポーツ」<sup>12</sup>である。パワースポーツは歴史的に男性の価値や経験に基づいており、男性の攻撃的気質や女性に対する優位性、自らの社会的・物理的空間を主張する権利の根拠となってきた。現在の支配的なジェンダー・イデオロギーは、男らしさは攻撃性と他者を身体的に屈服させる欲求を含むことを人々に認めさせようとする。コークリー（2011）によると、若年層の男性は、男らしいアイデンティティを確立するためにスポーツを利用するが、この過程のダイナミクスは社会階層によって異なることを述べた。すなわち、上流階級の少年にとって、男らしさとは、リーダーシップがあることであり、スポーツはリーダーになることを学ぶ場であった。中流階級の少年にとって、スポーツは社交の場であり、男性グループに受け入れられることで、自らの男らしさを再確認する。一方で、労働者階級の少年にとっては、スポーツはタフであること、飛びぬけて男らしい行動や人格を誇示する場であり、それが「男らしさ」の概念を体現するものであることを明らかにしている。このように、格闘技の競技としての性質は、労働者階級の「男らしさ」の体現に、極めて相性がいいものであると言える。

また、ポール・ウィリス（1996）は「労働者階級の男子生徒たちが進んで筋肉労働の将来を選びとるようになるには、少年たち自身の反学校文化が多いに作用している」<sup>13</sup>と述べ、労働者階級と反学校文化の関係を明らかにした。ウィリスは、「権威への反抗と権威順応者の排斥」という形で、労働者階級の子供たちが反学校文化のなかで自らの将来を進んで筋肉労働者と位置づけ、現実にも手の労働を選びとる判断が行われることを明らかにした。さらに、このような生徒たちは、「耳穴っ子」に対し、優越感をもつものは、とりわけ「性」の領域においてであると述べた。格闘家のステレオタイプである「アウトサイダーな格闘家」は、規範にはまらない逸脱者を描いたアウトサイダーであり、ウィリスのいう「野郎ども」のように表象されることが多い。また、「力強い格闘家」にみられる、発達した筋骨隆々の身体性や、根性などの屈服しない精神性の強調においても、労働者階級の「男らしさ」を体現するものになりうる。パワースポーツにおいて強調される、献身・勤勉・犠牲の概念においても、「ストイックな格闘家」像としてよくみられ、後の成功体験と共に語られることによって、現在の労働者階級の自己肯定としての装置として作用しているのではないか。近年の格闘家像として増加傾向にある「ギャップ性のある格闘家」はこれらのステレオタイプを前提とし、踏まえたいうで、今までとは異なったキャラクターとして提示される。そこで対比されるのは「耳穴っ子」、例えば高学歴、爽やか好青年、オタクなど、反学校文化の「野郎ども」を前提とした対比構造になっている。

このように、格闘技の文化的背景が「労働者階級文化」にあるということがわかる。メディアは、格闘技を上

<sup>11</sup> J・コークリー『現代スポーツの社会学』（2011）

<sup>12</sup> コークリーによると、「パワースポーツ」は「楽しさのスポーツ」と対比され、次の6つの点を強調するもので、①勝利を追求し、人間の限界を超え、相手を屈服させるために筋力とスピードを用いること。②優秀であることは競争に勝つことによって証明され、それは献身、勤勉、犠牲、自分の幸福を危険にさらすこと、痛みを耐えてプレーすることで達成されるという考え方。③身体を制御し監視する上で測定とテクノロジーの使用を重視する。④身体的スキルと競いに勝つことに基づいた選抜システム。⑤選手がコーチに、コーチがオーナーやフロントに従属する権威構造。⑥相手を屈服させるべき敵とみなすこと。

<sup>13</sup> ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』（1996）

記のものとして、強調し、編集し伝えることで、集合的感情を表現する。メディアを通じて彼らのアイデンティティを表現することによって、特定のイデオロギーを強化・再生産しているのではないか。

## 参考文献

- 井上俊『現代文化を学ぶ人のために』「現代文化のとらえ方」(世界思想社、1993)
- 大西鉄之祐『闘争の倫理—スポーツの本源を問う』(二玄社、1987)
- 岡井崇之『レスル・カルチャー』(風塵社、2010)
- 亀山佳明編『スポーツの社会学』(世界思想社、1990)
- 岸野雄三『現代保健体育学大系 9』(大修館書店、1968)
- 岸野雄三『体育史講義』(大修館書店、1984)
- 岸野雄三、成田十次郎他『近代体育スポーツ年表<1800—1997>』(大修館書店、1999)
- 小林正幸『力道山をめぐる体験—プロレスから見たメディアと社会』(風塵社、2011)
- 佐藤郁也『暴走族のエスノグラフィー』(新曜社、1984)
- J・コークリー『現代スポーツの社会学』(南窓社、2011)
- ジェラルド・ケニヨン他『スポーツと文化・社会』(ベースボールマガジン社、1988)
- ジョン・ハーグ・リーヴス『スポーツ・権力・文化—英国民族スポーツの歴史社会学—』(不昧堂、1993)
- 体育原理専門分科会編『スポーツの倫理』(不昧堂出版、1992)
- 片岡暁夫「スポーツと暴力」
- 清水毅「スポーツと宗教」
- 体育社会学研究会編『体育授業の社会学』(道和書院、1980)
- 高橋ひとみ『体育・スポーツ史』(星雲社、2001)
- 玉木正之『スポーツとは何か』(講談社、1999)
- 日本スポーツ社会学会編『変容する現代社会とスポーツ』(世界思想社、1998)
- 井上俊「近代日本におけるスポーツと武道」
- 杉本厚夫「日本から：消費社会とスポーツ文化の変容—スポンサーシップからパトロンシップへ—」
- 杉本厚夫『スポーツファンの社会学』(世界思想社、1997)
- 杉本厚夫『スポーツ文化の変容』(世界思想社、1995)
- ハロルド・ガーフィンケル他『エスノメソドロジー』(せりか書房、1987)
- ハワード・ベッカー『アウトサイダーズ-ラベリング理論とは何か-』(新泉社、1978)
- ポール・ウィルス『ハマータウンの野郎ども』(1996)
- マイケル・R・ボール『プロレス社会学』(同文館、1993)
- 松井良明『ボクシングはなぜ合法化されたのか—英国スポーツの近代史』(平凡社、2007) 松浪健四朗『格闘技の文化史』(ベースボールマガジン社、1993)
- 森川貞夫他編著『スポーツ社会学講義』(大修館書店、1988)
- 守能信次『スポーツとルールの社会学』(名古屋大学出版会、1984)
- <雑誌>
- 『Number plus 30<sup>th</sup> anniversary』(文藝春秋、2010)
- 『Sports Graphic Number』(文藝春秋)
- 『格闘技通信』ベースボールマガジン社
- 『ゴング格闘技』イースト・プレス
- <web ページ>
- “久保優太が誓う『新たな一歩』”.K-1OFFICIALSITE<[http://www.feg-jp.com/jp/news/2011/0922\\_max\\_02.html](http://www.feg-jp.com/jp/news/2011/0922_max_02.html)> (2011-9-22)
- “山本 KID 徳 郁 UFC126 に初挑戦! 「間違いなく余裕で勝つ」 ...WOWOW が独占インタビュー

—!".PRTIMES<<http://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000690.000001355.html>>(2011-2-2)

“「自分が弱いという気持ちだけは、誰よりも強かった」 武田幸三 拳に宿り続けるもの”. 日刊サイゾ  
—<[http://www.cyzo.com/2009/12/post\\_3436.html](http://www.cyzo.com/2009/12/post_3436.html)>

“魔裟斗”. wikipedia< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AD%94%E8%A3%9F%E6%96%97>>

“アリスター・オーフレイム”. Wikipedia

<[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%B  
B%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%95%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%83%A0](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%AA%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%B<br/>B%E3%82%AA%E3%83%BC%E3%83%95%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%83%A0)>

“武田幸三”. wikipedia< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%A6%E7%94%B0%E5%B9%B8%E4%B8%89>>

“山本徳郁”. wikipedia< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%B1%E6%9C%AC%E5%BE%B3%E9%83%81>>

“所英男”. wikipedia< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%89%80%E8%8B%B1%E7%94%B7>>

“バダ・ハリ”. Wikipedia

< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%83%80%E3%83%BB%E3%83%8F%E3%83%AA>>

“長嶋☆自演乙☆雄一郎”. Wikipedia

<[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E5%B3%B6%E2%98%86%E8%87%AA%E6%BC%94%E4%B9%99  
%E2%98%86%E9%9B%84%E4%B8%80%E9%83%8E](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E5%B3%B6%E2%98%86%E8%87%AA%E6%BC%94%E4%B9%99<br/>%E2%98%86%E9%9B%84%E4%B8%80%E9%83%8E)>

“久保優太”. wikipedia< <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B9%85%E4%BF%9D%E5%84%AA%E5%A4%AA>>